

月田秀子の昨日、今日、明日・・・

大西洋をはるかに望むテージョ河沿いのレストランで、アントニオと昼食をとっているところに、その悲しい知らせが届いた。「カルロス・ゼルが今朝、死んだ」。携帯電話を切るなり、真顔でアントニオは、そうつぶやいた。「嘘、嘘、信じないよ、そんな嘘・・・」笑っているつもりの中から、いつのまにか涙がとめどなく溢れ、サングラスの縁からはみ出し、買ったばかりの黒の毛皮のベストを濡らした。アントニオの目からも、涙が溢れていた。

アントニオと知り合ったのも、カルロス・ゼロのお陰だった。八年ほど前、リスボンの「ヌーメロ・ウン」というお店で、カルロス・ゼロの紹介で歌ったとき、挨拶にきてくれた恰幅のいい初老の紳士がいた。その翌日、彼は今日の感激のお礼にとアゼイトンにある自分のワイン醸造所に、私を招待してくれた。「João Pires」というポルトガルでも屈指のワインの醸造所だった。飲むばかりでなく、ワイン畑を見たいと言ったら、しわの下のつぶらな瞳を丸くしながら、風が吹きすさぶ、丘に広がる自ら開拓してきた広大な冬枯れのワイン畑に連れて行ってくれた。「あそこは自分が開拓した畑、その向こうは自分の息子が・・・」少年のように目を輝かせながら説明する彼がやけに遅く見えた。そして、ワインと同じくらいファドを愛していた。その紳士がアントニオだった。

私たちは目を真っ赤にしても、注文した魚を、悲しみを体の中に押し込むように食べ、レストランを後にした。気を抜くと、その全てが口の中から飛び出してきそうだった。ページュのジャガーを走らせ、リスボンへ向かった。海に負けないほど青い空を、一羽のかもめがよぎって行った。その時から、リスボンの空は、青さを失い、灰色に覆われた。

「カジノ・エストリルで、君が歌う手筈を整えた」そんなファックスが、カルロス・ゼルから送られてきたのは、去年の11月のことだった。彼は一年程前から、カジノ・エストリルで、毎週水曜日ファドを歌っていた。毎回彼は、様々なファド歌手を招いていた。そのうちの一人として、私は、嬉々としてはるばる日本からやってきたのだ。私の出演日、リハーサル中に、体調が悪いというカルロス・ゼルに、「ああ、可哀想に、風邪かな？熱があるの？」と彼の首に手を当てたのが彼にふれる最後になった。リハーサルで歌うカルロス・ゼルの声を楽屋で聞いた私は、てっきりその日彼は歌うものと思いついて、しかし、彼は結局本番にも出ず、居合わせた客に挨拶だけして、家に帰ったという。彼の手から渡されるはずの記念のガラスのギターラの置物は、急遽司会を勤めた男性から受け取った。招待してくれたカルロス・ゼルに、ありがとうの一言も言えないまま、昨夜のステージの幕は下りた。そのことが大きく心にのしかかっている、その晩、ほとんど眠れなかった私は、朝方、誰かの悲鳴を聞いた。それは、私にとって大切な人が、亡くなる時に決まって聞こえてくる音だった。

アントニオに送ってもらってリスボンの安宿に戻り、頼んでおいたポルトガルギターを受け取るために、ギターの圭ちゃんに落ち合った。ギターを作ってくれたオスカル・カルドーゾが、工房に入るなり、「カルロス・ゼルの死を、ラジオで知ったよ。秀子は、彼に呼ばれてきたんだよね。可哀想に」と、目を伏せながら共に、彼の早すぎる死を悼んでくれた。ポルトガルギターは、スプールとジャカランダを使った見事な出来のものだった。そのギターを受け取るべき、ギタリストの上川保は、日本を発つ二日前に、お母様が亡くなったとの事で、来れなかったのだ。悲しい事が、重なった今回の旅だった。

今回は、カジノ出演という事で、新聞各社の取材、ラジオ、テレビ出演と、ポルトガル語の洪水の中で、私の頭は混乱し、憔悴しきっていた。カルロス・ゼルの葬式の前のテレビ出演は、何よりも辛かった。私の頭の中は、カルロス・ゼルの事で一杯だった。女性キャスターの矢継ぎ早の質問に答える私の顔は、どんなに醜く映った事だろう。何もしゃべりたくなかった。ファドのこと、アマリアとの出会いのこと、そんな事はどうでもよかった。ポルトガルでたった一人の私の友達、理解者が、消えてしまったのだ。テレビ局のメイク室でも、本番の最中も、待合室でも、安宿に戻っても、たがが外れたように、私はうつろだった。宿の狭い部屋には、そんな私を気遣って、

東京から駆けつけたさくびい嬢からの赤い薔薇の花が一輪、私を見守ってくれていた。その日は「dia namorados」聖バレンタインデーだった。

翌日、カルロス・ゼルの最後の歌声をたまたま録音していたので、それを残された彼の未亡人に渡したいと思いたち、CD-ROMに録音してもらう為に友人のジョゼを訪ね、それを最後に、私はリスボンを離れ、アレンテージョにある、エストレモシュ行きのバスに飛び乗った。

エストレモシュの丘の上にある古い修道院を改装したボウサーダにチェックインして部屋に入り、白いペンキの剥げ落ちた窓を開けた。夜気を含んだ風が、道中のバスの窓越しに日に焼けた頬にひんやりと気持ちよかった。すでに陽は落ち、西の空は真っ赤に染まっている。リスボンの町は、その彼方にある。もはやカルロス・ゼルに出会うことのない町。当分その町を訪れる事はないだろう。例えポルトガルを訪れる事があっても、私は、旅人としてポルトガルの各地を彷徨い、リスボンに足を向けることはないだろう。「一つの時代が終わったのだ」。私は、そう自分に言い聞かせ、窓を閉め、久しぶりにバスタブに湯を張り、着古した黒いセーターを脱いだ。「誰かが死んだのか」と、アルファマを彷徨っている時に会ったカタツムリ売りのカルメン・リダおばさんが、黒づくめの私の格好を見て尋ねたことを思い出した。「友達のカルロス・ゼルが昨日亡くなったの。あのファド歌手のカルロス・ゼルが・・・」いぶかしげに彼女は私の顔を覗き込んだ。彼女は、カルロス・ゼルのことは知らなかった。ファドの何たるか、ファド歌手の名前なんて、アルファマの路地裏でカタツムリとともに暮らす彼女にはそんなことはどうでもいいことなのだ。「痩せたな」、鏡を見て思った。ぬるめのお湯に身体を横たえた時、三週間の様々な出来事が思い出された。旅はあと二日で終わろうとしていた。

「機内で第一声、マダムと声をかけられたのは、ずり落ちた老眼鏡のせいだけではないだろう。51才の旅が始まろうとしている。毎日日記をつけること」。巴里に向かう機内でそう記した後、手帳には何も書かれてはいない。ただやたらと取材のアポイントが、スケジュール欄を埋め尽くしているだけだ。そして、2月13日の欄には「11時半、カジノ・エストリル」その下には、「カルロス・ゼル逝去。9時半ミサ、葬式。」どうしようもない事実が記されているだけだ。

カルロス・ゼルに初めて会ったのは、1988年、テレビの「ピアノ・バー」という番組に出演した時の事だった。

やけに威勢のいい歌声に、少しのけぞってしまった事を覚えている。それ以降、彼は、自分が歌った後で必ず私を紹介し、半ば強引に私は歌わされる羽目になった。ファドのお店でさんざんファド漬けになった私を、宿まで送ってくれたことがあった。宿の前で車を止め、急に真顔でカルロス・ゼルが思いつめたように私の手を握り締めながら、例の威勢のいい口調で、一言一言噛みしめるように言った。「僕は、真面目な男だ。君にもわかっていようが、僕は初めて君を見た時から、君の声を聴いた時から、君を愛してしまっただけだ。なのに、僕にはその時にはすでに妻がいたんだ。でも、その気持ちはわかっている。あなたの気持ちは大切に心にしまっておくわ。私たちはいい友達になれるわね」。私は、彼の両頬にキスをして、車を降りた。塩辛いキスだった。

そして、2月13日あの夜、カジノで歌うようお膳立てをしてくれたのが、彼の私への最後のプレゼントだったのだと、今、私は思う。私に関する記事は、その数日後の彼の死を報道する記事よりも圧倒的に大きかった。それは、彼が歌いつづけた本当の価値を思うと、彼の死に涙する人たちの多さ、悲しさを思うと、辛すぎる現実だった。その現実から逃げるように、私は、リスボンを離れた。

けれど、それも彼が残してくれた、最後の大きなプレゼントだったのだと思うと、そのプレゼントを大切に携え歌いつづけてゆく事が、わたしにできるただ一つの彼への恩返しだと思ふようになった。彼が好きだった伝統的なファドの一つくらいは歌えるようにならなければと、ポルトガル語ももっとしっかり勉強しなければと、今やつと、前向きに考えられるようになった月田です。

アマリアなしでは、 私は何者でもない

Sem Amália (Rodrigues) não sou ninguém

カジノ・エストリルでの「水曜の夜のファド」の、非業の死をとげたカルロス・ゼルの最後の招待歌手。それは、ポルトガルの心を持ち、それゆえにわかカモンイシュの言葉でもってファドを歌う日本人だった。

「クレイオ・ダ・マニャン新聞」発行
(週間ドミンゴ・2002年2月24日発売) 掲載記事より



Hideco Tsuquida
«Sem Amália (Rodrigues)
não sou ninguém»

月田秀子が、友達の間ではデコと親しみを込めて呼ばれているそうだが、ファドそしてアマリア・ロドリゲスの歌声を初めて聞いたのは1982年のことだった。「それは、私の友達の一部がアマリアのレコードをプレゼントしてくれた時のことだった」。それを聞いた時、彼女はそのメロディーに、心打たれた。「意味もわからないのに、その声は、心の深い底から響いてきた」と彼女は告白した。それは、一目ぼれのようなものだった。

二年後、生まれた町東京を後に、リスボンへと向かった。「それはファド、そしてアマリア・ロドリゲス(後に出会うことになるのだが)を求めての旅だった。様々なファドの店へ行った。ポルトガル語をよく知る為でもあった。けれど、アマリアのようなファドはなかった。そのように思えるファドを聴くことはなかった。私は悲しかった。なぜなら、私が聴いたファドは、どれも、あまりにも吠えるだけのものだったから。わめくようなファドには私は耐えられなかった」と彼女は語った。

1986年、ファドに出会う前まで歌っていたフランスのシャンソンとポルトガルの魂を交えたコンサートを日本で開催した。「とても緊張したけど、何とかやり終えた。そういえば、コンサートの時、緊張するのはいつものこと」。1987年から一年間、リスボン大学の外国人向けポルトガル語学科に通う傍ら、ファドの世界に親しむためにリスボンに移った。

《ファドはどこに?》

彼女の歌を聴く典型的な聴衆を知られば知るほど、デコはアマリアのファドはどこにあるのかと自問自答するようになっていった。「私の心をとりにしたファドは一体どこにあるのか?伝統的なファドや、純粋なファドというものが存在することを、今なら解っている。それらは違うもの。純然たるファドは、リスボンのアルファマ、パイロ・アルト、ピカ、マドラゴア、そこに住んでいる人たちのもの。私はポルトガル人でもなければ、そこに住んでいる人間でもない。だから、純然たるファドを歌うのは難しいことなのです」。そう説明した。

1988年、旅先のアルガルヴェでラウロ・シルヴァに出会い、その後、彼はデコに関する大きな記事の影の立役者になり、そのことはRTP制作のテレビ番組「ジャ・エスタ」出演、アマリアとの会見、「ファド大祭典」を始めとする様々な催しへの出演へとつながっていった。それによって、フランスのシャンソンを捨て、彼女は、魂と心をファドに捧げることになった。

以降、秀子は、日本とポルトガルの間を行き来することになる。「ポルトガルへは、何度となく足を運んでいます。たぶん平均して、

一年に一回は来てるかしら」と彼女は思い起こすように語った。ラマロ・イエネス元大統領、カヴァコ・シルヴァ元首相、メロ・ゴウヴェア元駐日ポルトガル大使といった名だたる招待客の前で歌った後の1990年、「サウダーデ」というタイトルの一枚目のCDを録音した。「ファドを録音している時、心が熱くなってゆくのを感じる。どう説明したらいいのか、私の中に棲んでいる悲しみを感じる。ファドを歌うことで感情や感覚が掻き立てられてゆく。歌っている時、魂の中で私はどこへ行こうとしているのかすら、解らないのです」と彼女は心の一端をのぞかせた。

《説明できない悲しみを感じる》

月田秀子は、東京とリスボンを行き来するこの十年間を、コンサート活動、レコーディング、そして、世界のどこにもないこの音楽を普及するために過ごしてきた。「サウダーデ」に続いて、「ジャンジャンライブ(1993年)」「ファド・メノール(1995年)」「私の憂い(1997年)」「ありがとうアマリア(2000年)」のCDを録音した。

52年前に日本に生まれたファド歌手は、はにかむようにこう語ってくれた。とてもはにかみながら。しかし、終始ポルトガル語でのインタビューと会話に、全身全霊で答えてくれた。彼女自身の歌うアマリア・ロドリゲスのファドを聴きながら彼女は泣いていた。ずっと。そして「説明できない悲しみを感じるの」としみじみ言った。

秀子は、ファドの伝統は若い世代の歌手によって受け継がれてゆくと確信している。「素晴らしい声を持った若いファド歌手達がポルトガルにいることは事実です」と念を押した上で、こう強調した。けれど、ファドの女王に匹敵する歌手はどこにもいない、と。「アマリアなしでは、私は何者でもない」。そしてこう締めくくった。「私には、いまだに説明できないのです。私の心を占めているこの感覚について。アマリアの声は、私の心の奥底まで響き渡る。彼女の声は、強く、活力に満ち溢れ、想いを私に伝えてくれるのです」。

《カルロス・ゼルの最後の夜》

月田秀子は、去る13日のカジノ・エストリルでのカルロス・ゼルの「水曜のファド」の最後のゲスト歌手となった。彼はカジノのアートガーデンで毎週水曜日開かれるコンサートの立役者として、毎回様々な歌手を招待してきた。その夜、カルロス・ゼルは歌うどころではなかった。「気管支の具合がなんとも悪くて歌えない」と、クレイオ・ダ・マニャン紙の記者にもらしていた。その数時間後、彼は、全ての報道のとおり、肺気腫が誘発した呼吸不全により、自宅で亡くなった。

以下にご紹介する紀行は、2月13日のポルトガル・カジノ・エストリルでの私のライブを聴くために、はるばる日本からバルセナ経由で駆けつけてくれた「きうびい嬢」の紀行文です。彼女のホームページから、転載させていただきました。興味のある方は彼女のホームページ (<http://homepage1.nifty.com/kiupsanzancooking/recipememo.html>) へどうぞ。

きうびいレシピメモ2002年ポルトガル編

2月12日(火) バルセロナからリスボンへ

ポルトガル航空は機内もきれいでスチュワーデスも普通でおとなしめ。空から見る町は、オレンジと白と青いテージョ河。タクシーのおっさんものんびり。タクシーの中で携帯電話がなり、出るとチャビエからで、楽しく話していたらタクシーの運転ちゃんが「Senorita espanola? (セニョリータ エスパニョラ?)」と言った。噂には聞いていたが、ポルトガル人のスペインコンプレックスはかなりのもので、たとえわかってもしゃべらないらしいというのを耳にしていたので、なるべく行く前にちょっと勉強したポルトガル語を使うようにした。幸い3日後にはかなりイケていた。とにかくなんかどよんとした、のんびりした町だ。宿泊はPensão São João de praça。カテドラルの近くの古いペンションである。1泊28ユーロという恐ろしい値段だった(1ユーロ=120円)が、まあまあ、こんなもんだらう。

月田秀子さんのギタリストをつとめている野上さんと彼女さんが同じペンションに宿泊。月田さんとはいうと(以下ヒデコさんと呼ばせていただく。)既にカジノのあるエストリルへ。連日新聞だのラジオだのインタビューに引っぱりだこに加えいろいろあって、我々がスターは早くも避難していたのだ。

夜は、野上さんたちと一緒に、ヒデコさんの友人であるギタリスト、マリオ・パシェコ氏プロデュースの「Clube do fado」へ行く。かなり大きい店、お客さんも一杯である。野上さん曰く、ファドも観光客向けから素人のど自慢までいろいろあるけど、ここはなかなかレベルが高いらしい。はじめにアルシンドというしぶい歌手が歌う。ひしひしとくる、いい歌声である。なんと感想をいったらいいのかなあ。なんともいえない。ただ、独特の哀愁が漂っている。ああーポルトガルにいるんだなあーと、ワイン片手に思った。

次は女性の歌。ああーファドだなあ。ファドとしかいえない、でも、確かに「うーん、ファド」。どの国にもない、不思議な響きである。

もう一人若い女性が歌ったが、なかなかいい。日本で人気が出そうな気はする。これから楽しみ。

野上さんが「月田さんはほんとにポルトガルが好きなんや。ポルトガルで元気を取り戻すんや。いろいろな歌手がいるけど、あの人はなんちゅーか「ボ」がついとる。500年前はこっちの人やったんやろなー。あのメラメラに「おおー」っと一緒にやろうと思うんやー」と言っていたが、明らかにスペインのダダダダオーレー!!!!!!みたいなノリではない。けど、かなり血中メラメラ度は高そうだ。中華鍋と土鍋みたいなもんだらうか。

2月13日(水) エストリル

前日、水曜の昼をヒデコさんと食べる約束をした。どうやらあまりこっちに来て食べていないらしい。「肉が食べたい」の一言でお供することを決意。早めに朝ごはんを食べ、エストリルまで向かう。ペンションから最寄り駅までは歩いて15分。とにかくやたら多い坂道に面くらいながら進む。雪が降ったらスキーできるくらいの勾配である。11時ごろにエストリルに到着するように、10時半の電車に乗る。1.05ユーロ、激安だ。

美しい海とあたたかい陽の光、気温は19度と、かなり暑い。駅前に誰でもわかるように「CASINO ESTORIL」がある。ヒデコさんに電話。こちらはカジノに向かって坂を上がり、彼女はカジノ横のホテルから下る。

遠くから真っ黒い人が来た。この暑さなのに、すごい防寒着だと思ったらそれがヒデコさんだった。髪こそアップにしていたが、雰囲気はまさに「アンニュイなカラス(マリアではなくからす)」、「黒いワシ」というほどの大きさではない。なんだか日本にいるときより細い感じがした、どうやらかなりお疲れの様子。取材でも「悲しそう」といわれたそうだが「でもファドだからー」と大きな目と口がにっと開く。国籍不明な人だ。

浜辺を歩いてオープンエアの(ってほとんどどこもそうだけど)バルへ。生ビールをご馳走になる。バルセロナでインフルエンザであやうくリスボン

行きを止められそうになったこと、絶縁していた「ママ」と会えたこと、ヒデコさんのリスボンについてからの話などなどとりとめもなく話し、レストランへ向かう。野菜が圧倒的に不足していて、昨晚も食べていなかったのおなかペコペコ。初めてのvinho verdeもいただき、どんと胡椒ののったステーキがやってきた。うまい、が辛い。辛いものを食べると声が出るそうで、やはり我々がスターにはせいをつけて本番にのぞんでいただかなくては。いつの間にか会話がすっかりポルトガル語になり、ワインの酔いも手伝って、ポルトガル語でなぜか話しているおかしさもあって腹筋を鍛えるほど笑いあってしまった。

食後浜辺に散歩に行き、あー今夜気持ちよくヒデコさんが歌えるといいな、楽しみだな、とゆっくりとしたリズムで歩む我々が美しきマダムカラスに後ろから声援を送り、駅で別れた。

野上さんたちと7時に集合、近くのレストランでカルドヴェルデや鱈やなにやらいろいろ食す。ポルトガル料理はまずくはないが、かなり味が美味だ。何か足りない。でも何かはわからなかった。

10時にカジノへ着く。当たり前だけどカジノだからキラキラして、野上さんの「ここでファドかいな?」という言葉がびったりだった。カジノ自体は1Fはマシーンばかりで、ばかでかいゲーセンといった感じ。今夜のステージは脇のバー「ワンダーバー」だ。

今夜のステージのオーガナイザーであるカルロス・セル氏の写真がどかんとあり、13日のところに我々がTSUQUIDA HIDEKOとアントニオ・ロシャの名前がある。開場は11時。お洒落した人たちがバーに入る。我々はヒデコさんが予約しておいてくださった席につく。とてもいい位置である。隣のテーブルにはヒデコさんのポルトガルの関係者たちが席を埋めている。そして我々の横にはジョアンという紳士とマリアという女性。

このジョアン、ヒデコさんのファンで、10年前に彼女がテレビ出演したのを見て数年前にそのことで彼女に手紙を送ったという人である。元々は大変恰幅のいい人だったらしいが、病気のためすっかり小さくなってしまったという。我々はポルトガル語とフランス語とスペイン語のごっちゃになったので話していたが、やはりスペイン人よりもおとなしく、「私たちはもっと「FADO, FADO」なのよ」と言っていた。そうなんだよ。ほんとに。ノリが違うのだ。気抜けするほど。それは年配の人々だけでなく、いわゆる普通の店の人もおしなべておとなしめ。が、そのジョアンに関しては、語る目は非常に強かった。腕も足も弱々しく、ほんとにずっと夜までもつか、と思うくらいだったが、きうびいに向かってゆっくりと静かに、でもとてもしっかりと話してくれた。

さて、いよいよ、である。数曲の歌と演奏のあと、我々が月田秀子が登場。はじめに「Lagrima〜涙〜」。実はきうびい、この曲だけに関してはいつも一言あった。彼女が歌うのを何度かそしてCDで聴いていたが、何かひとつ気になるものがあつたのだ。だから今回の聴いて驚いた。なんだろう。テンションの問題なのか? 今まで聴いていたなかで一番完成度が高かったような気がする。だから、スペイン風にいえば「やっー!!こりゃ今夜もだいじょぶだー!!!」とおよそファドには似合わないガッツポーズをしていた…。

そのほか、昼間に「日本語で歌って欲しいっていうから、6曲なんだけどなかなか選べない」と彼女が言っていたとおり、2曲は日本語で歌った。

3曲歌った後の休憩での反応は上々。マリアも「とてもいい」と、すごく控えめなんだけど目は光っていた。ジョアンに関してはなんとも頷きながら、「ヒデコの歌がとても好きだ。言葉じゃ言い切れない。ヒデコの歌には魂がある。日本にはこんなにすばらしいファディスタがいる。Parabens Japao(日本、おめでとう)」ときうびいに言った。心が熱くなる一言だった。

そのほか、アマリア・ロドリゲスの、ジョアンの言うところのクラシックなファドを3曲。最後にポルトガル人の心の歌である「Povo que lavas no rio〜川辺の民〜」を歌ったとき、ポルトガル人の反応はそれまでに

なく真剣だった。とにかく、ギタリストたちは時折タイミングをうかがいながらもしっかりサポートしていたし、成功。月田秀子は暗いステージに光る真珠のようだった。

このライブの様様をビデオにとって、日本のテレビで流して欲しいという局があったらしいが、ホンマにどっかでやってくれんかねールポ。一緒にステージに出たアントニオ・ロシヤは非常にヒデコさんには冷たくて「あんなのファドじゃない」とか言ってたらしく、まったく笑わなかったと言っていた。アントニオはアントニオで確かに聴かせる人だしタイプがまた違うけど、でも月田秀子さんへの聴衆の反応はホンモノだったし、なめられてるわけじゃ決してないんだからやはりマジでもっとメジャーになってもいいと思うなあ。

強い感動を胸に、カジノを後にした。しかし、人生なんともいろいろあるものである。オーガナイザーのカルロス・ゼル氏はそのステージを最期に、翌日かえらぬ人となったのだから。

2月14日(木) 神の思し召し

カジノの感動をあとに、少々遅めの朝食。宿の近くにあるファドとポルトガルギターの博物館へ行く。当たり前だけど地味で、でもたくさんのレコードがディスプレイされていて、とてもうれしかった。そしてこの国独特の、なんだか物憂げで、ぼわんとした気分、だんだんきうびいも包まれていったことは否めない。

その後、野上さんたちはギター工房へ。行きたかったがタイミングを外したため、宿のレストランで食事。うーん…きうびいの好物のエビなんだけど、なんか足りない…なんだ…と、サラダを口にしたとたんわかった!!ピネガだ!!ニンニクだ!!スペインでパンチの元になってたこの二つが圧倒的に足りないのだ。妙に納得して宿で一休み。次にサンジョルジュ城までまたえらい坂道を行ったり来たり。またもやレコードをみて4時過ぎにヒデコさんたちに連絡を入れる。

するとアクシデントがあって、夜の行動が変わりそうだという。おまけに9時にテレビの生放送。終わってもスターは大変である。しかし宿に帰ってびっくりした。アクシデントとはカルロス氏の死去だったのだ。

エストリルからリスボンの宿に戻ったヒデコさん。野上さんたちに事情を聞いて、びっくりするともいなんだかとても動揺してしまった。それから頭に浮かんだ言葉は「Foi por vontade de Deus... (神の思し召し)」とはいえ、恐ろしいタイムである。

さまよい迷うような瞳から涙をこぼすヒデコさんを見て、どうすることもできなかった。当たり前だけどどうすることもできなくて、でも

何とかしたくてなんだかよくわかんないけど一人にしておきたいけど一人にしておきたくなくて、ただそばにいることしかできなかった。

とりあえずテレビ局と、Camaneのコンサートに行くということだったので、大丈夫だろうけどがんばれえーと心で叫び、野上さんたちとこれまたほんわかしつつも激安な中華を食べ、哀し気な通りを夜宿の窓から深夜まで見つめて最後の夜を過ごした。

2月15日(金) サウダーデ???

朝7時半に起床。床にはドアの隙間から滑り込んだヒデコさんからのメッセージがあった。朝カルロス氏のミサに行くということで、朝9時にはリスボンを出るという。きうびいもちょうどその時間に空港へ行かなければならず、朝食でヒデコさんに会い、さまよい迷う瞳を残してヒデコさんは駅へ、きうびいは荷物をまとめてタクシーを呼んだ。

タクシーの中で、きうびいは突然わけのわからないものに包まれ、気づいたら目から鱈の塩漬けなみの涙が落ちていた。なんでやねん? わからない。空港へ着く。チェックインをすませて新聞を手取る。カルロス・ゼル氏の追悼記事が一面と文化面にあった。

今頃ミサかなあ…考えてみたら、今回ここまで来られたのも彼がああQuartas de Fadoをやっていたからで、感謝しなきゃいけないなあ…と、カフェでたすみみコーラで祈っていた。

リスボンから飛行機が離陸するときも、何故だかまた塩辛が目から出てきた。これ、一体なんだろう。わかんない。今までこんな気持ちになったことはない。哀しい?のではなく、なにかにまるで取り付かれたようだった。

バルセロナに着く。アムステルダム便まであと1時間半だ。ヒデコさんに連絡を取った。朝あまりにさまよった目をしていたので、あまりお礼もいえなかったのが気にかかっていたのだ。ミサが終わって沢山食べていると聞いて安心する。

さて、結局その後うどうだどうすることもできず、マジエルスに電話する。「なんか変だよ。すごく悲しいの。ポルトガル病だ。なんかわかんないけどメランコリックだよ」といったら、「あたし、あの国悲しいから嫌い。リスボンは灰色の町だよ」と言われた。灰色ではない。なんともいえない灰色とオレンジの混ざった、不思議な色だ。

3人にティッシュをもらい、きうびいはすっかり塩辛くなっていた。そして、イベリア半島から離陸したとき、少しずつバルセロナの明るさを取り戻し、ひたすらワインとジントニックで爆睡…夢から覚めたらもう日本大陸だった。

<ファンとの近くて遠い関係 part 2> 月田秀子

人と食事をするよりも、圧倒的に一人で食事をする事が多い。寂しい独り者である。行きつけの店は、「ただもくもくと食べるための店」と「会話を楽しむための店」と、使い分けしている。マア、後者は飲み屋が多いが、最近、前者のほうが気楽でよいなと思うようになった。アパートの近くに、昼飯によく行く蕎麦屋がある。店に入るなり、レジの後ろにおいてある新聞を取り、むさぼるように読む。プールの帰りに寄ることが多いので、髪は濡れているし、すっぴんだし、どこの誰か知られないほうが良い。ある日そこで、よくいくブティックの主人とかち合い、たちまち、「この人は有名な歌手さん」とやられてしまった。それから、素っ気ない店員の態度が、うっとおしくらい人なつくようになった。

手元に、「居酒屋の流儀(太田和彦著)」と題した本の一節のコピーがある。ファンのO氏が送ってきてくれたものだ。彼は、時々そうやって、様々なジャンルの本から、私に参考になるであろう切抜きのコピーを送ってくれる律気な数少ないファンの一人である。前回のアートクラブのライブでの帰り際に、「ファンと、歌手との距離について、僕が日ごろ思っていることと似たことを書いてある本の一説を、送ります」と言っていたことを思い出した。

「常連は、その店を好きで仕方がなく、今日も客が入り、うまいっていいかを心配して見回りに行くのだ。開店早々に入るのは、客の呼び水になるためだ。誰も客のいない店は入りにくい。そのためわが身をさし出す。末席をとるのは、もちろん他の客に上席を譲り、居心地のよい落ち着く店と思ってもらうためだ。注文も、この店のお勧めはこれです。というさりげないアピールである。(中略)そして、ほどよく客でいっぱいになると安心し、席を譲り、帰ってゆく。(中略)まるで黙って恋人につくすかのごとく目立たぬよう店に気を配っている。常連とはかくもいじらしいものなのだ。人間関係と同じで、長くつき合うためには、あまり深入りしないように心がけるのが本物の常連なのだろう。(中略)私は主人と友達になりたくて居酒屋へ行くのではなく、主人と客、という関係が好きなのだ。いくら親しくしても間にはカウンターが一本通っているからいい」

人は様々だし、性格的なものもあつたりして、異論反論はあるだろうが、我が物顔で、無神経に手前勝手に店の雰囲気壊す客に、彼の爪の垢の一つも飲んでもらいたいと思うのは、これまた店主側の勝手な願望だろうか?

cartas

●先日、八代亜紀のデビュー当時のLPを聴く機会があって、まるでキム・ヨンジャが「朝の国から」でデビューした頃の圧倒的な声量を持っていたのに驚きました。五木ひろしにしても、美空ひばりにしても、デビュー当時は感動をもって聴いた筈なのに、慣れてしまうと感動が薄れるものだと思っていました。しかし、美空ファンがいかにか賛美しても、私は、子供の頃の彼女のレコードには素直な気持ちで接することが出来ても、テクニックで声量をカバーした美空ひばりの歌にはある種のおぞましさを感じていました。五木ひろしにしても同じです。

先日、「三裕の館」で聴いた月田さんの「大河の一滴」は、多分月田秀子が唄えばこうなるだろうという「人生讃歌」「人間讃歌」でした。「大河の一滴」の曲自体は「悲しみを抱きしめて」という題の方がふさわしいと思いますが、歌詞は決して絶望ではなく、月田さんの歌い方を聴いているとエディット・ピアフの「愛の讃歌」がオーバーラップしてきました。

以前ラジオの生番組で、前川清が、「俺は川原の枯れすすき…」という歌を歌っていました。一番ではささやく様に、つぶやくように、スローテンポで、二番、三番に行くに従ってテンポも声量も節回しも、西洋音楽のデベロップメントと云った趣で歌い上げ、畳みかける彼のテクニックを超えた声量と情感にしばれたのを覚えています。

普通、シングルカットの曲では、歌唱指導用みたいな単調でおとなしい唄い方をするものらしいのですが、どうせ月田さんの歌を聴いてもそれを真似てカラオケで歌えるはずもないのですから、ポルトガルでの録音はB面ということにして、ヴォーカル面は、むしろ、ワインの酔いにまかせてでも、ライブで歌ったものの中から、よいものを選んで入れてもらえませんか？ライブ歌手月田秀子らしく…。鈴木しげこという歌手の「大河の一滴」を傷ついた大人たちへのララバイだと思いながら聴きましたが、月田秀子なら、ピアノシモからフォルテシモまで自在に出る声で、「癒し」の出しから「人間讃歌」に至る道程を一曲の中で表現してくれると思います。そうすれば、一曲の中で、趣の違った曲と歌を一度に聴けるので「一粒で二度おいしい」わけです。いくら、15勝をコンスタントにあげていても、デビュー当時の魅力は求めようもない野球の投手の例もあります。あまり完璧を求めて月田さんの中でこの歌に対する感動が薄れたり、技術的に苦痛に感じたりすることがないうちに、「エイッ！」と発売してください。その思いっきりも歌のうちです。専門家のようなことは云えませんが、月田マニアではない、いち月田秀子ファンとして、勝手なことを言わせてもらいました。くれぐれも肝臓にはご注意ください。(大阪/I-T大)

(いやはや、貴重なご意見、居を正して読ませていただきました。「エイッ！」と背中を叩かれた想いです。目が覚めました。ありがとう。)

fados canções

恐れ

訳：カウド ヴェルデ

MEDO

Letra : Reinaldo Ferreira
Musica : Alain Oulman

夜 私が誰と眠りにつくのか
夜 私が誰と眠りにつくのか
それは私の秘密 私の秘密
でも どうしてもと云うなら
どうしてもと云うなら 教えよう
共に棲むのは恐れです
共に棲むのは恐れです
そう 恐れだけ ただ恐れだけ

引いては満ちる孤独の中で
たちまち不安に揺さぶられるのは
たちまち不安に揺さぶられるのは
ささめく静寂があるから
ささめく静寂があるから
闇に響く家具の声に
理性はかき乱される
理性はかき乱される

大声で助けを求めても誰が救い出せるだろう
私の中にひそんでいるものから
誰が私を救い出せるだろう
いっそ命を絶ってしまいましたかった
いっそ命を絶ってしまいましたかった
けれど私にはわかる 彼が必ず待ち受けていると
行き着く先の橋のたもとで
行き着く先の橋のたもとで

Quem dorme à noite comigo
Quem dorme à noite comigo
É o meu segredo, é o meu segredo
Mas se insistirem lhes digo
Mas se insistirem lhes digo
O medo mora comigo
O medo mora comigo
Mas só o medo, mas só o medo

E cedo porque me embala
E cedo porque me embala
Num vai e vem de solidão
É com silêncio que fala
É com silêncio que fala
Com voz de móvel que estala
E nos perturba o razão
E nos perturba o razão

Gritar quem pode salvar
Gritar quem pode salvar-me
Do que está dentro de mim
Gostava até de matar-me
Gostava até de matar-me
Mas eu sei que ele ha-de esperar-me
Ao pé de ponte do fim
Ao pé de ponte do fim

informação

- 『月田秀子コンサート2001』のビデオの申し込みは締め切らせていただきました。

『月田秀子コンサート2001』のカセットテープ(60分テープ2本組:4,000円+送料500円)のほうは、申し込みがほとんどなく、制作原価割れの状態です。お申し込みいただいた方には、NHKラジオ深夜便『ナイトエッセイ・ファドを唄いつづけて』4回分のテープを、おまけにつけさせていただきます。お申し込みは、下記郵便振替にてお願いいたします。 ※通信欄に内訳を必ずお書きの上、お申込ください。

郵便振替:00990-6-18440 月田秀子ファド倶楽部

<収録曲目>ユニコーン・私の中のファド・叫び・失った心・洗濯・涙・不如意・アマリア・私のファド・祈る人・汽車は八時に出る・日曜はだめよ・ギターよ教えて・白い家・カルーソ・バルセロナの舟の上で・大河の一滴・暗いはしけ・旅の終わりに

- CD「私の憂い」を増盤しました。お申し込みは、上記宛、郵便振替で。(CD代金 3,000円+400円)通信欄に必ずアルバムタイトルを書いて下さいね。

- 『西井義晃油絵展-ポルトガル・アンダルシア叙情』2002年4月1日(月)~4月6日(土)11:00am~7:00pm(最終日6:00pm)が、東京銀座の文芸春秋画廊(tel.03-3571-6493)にて開催中です。今回私が訪れたエストレモスの村の作品もあるそうです。

<月田秀子のスケジュール>

4月 3日(水) 大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
18日(木) 北海道・旭川「旭川グランドホテル」	*問合せ : 0166-24-2111
20日(土) 北海道・函館「若松旅館」	*問合せ : 0138-59-2171
21日(日) 北海道・江差「江差文化ホール」	*問合せ : 01395-2-0007
23日(火) 北海道・小樽「ヒルトンホテル小樽」	*問合せ : 011-241-3871
25日(木) 京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
29日(月) 大阪・心斎橋「アートクラブ」 ※祭日のため、演奏時間変更。①6:00~ ②7:30~ お一人様4,500円(2ドリンク・おつまみ付き)	*問合せ : 06-6212-2870
5月 1日(水) 大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
26日(日) 大阪・桜橋「ブルーノート ーきまぐれライブ Vol.7」 ※別紙チラシ参照ください。	*問合せ : 06-6345-5062
27日(月) 高知「スミセイライフミュージアム・生きる」 ※アートクラブでのライブはお休みさせていただきます。	*問合せ : 06-6311-0618
29日(水) 静岡・浜松「ホテル・コンコルド「スカイレストラン・エトワール」」	*問合せ : 053-457-1114
30日(木) 京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
6月 5日(水) 大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
24日(月) 大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
27日(木) 京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535

<編集後記>

書いたり、人と話したりすることで、少しずつ心が整理されていくものだ。会報の発行は、それに似ている。私自身を見つめる作業。それを日本語で出来るありがたさ。ポルトガル語の壁の大きさに打ちのめされた私に、日本語がこれまでにない優しい。記憶力の衰えはどうしようもない。できないことを嘆くのではなく、できることを精一杯伸ばしてゆく、そんな心意気で生きてゆきたいものだ。桜咲き、木々が芽吹く季節。お酒を少しだけもって、緑の空気を吸いに行こう。いただきものの鯖のへしこを少し持ってゆこう。一切れあれば、一升飲めるか。連れがないのは何より寂しい。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ
<http://www.fado.jp/>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第34号
- 2002年4月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808